

# 消防・防災一筋90年。 業界の常識に捉われない発想が開発のヒント!

## 事業内容

消火設備、警報設備、防排煙設備および避難設備の設計施工。各種消火設備の保守点検、防災管理点検ほか。消火器・火災警報器ほか各種防災用品の販売/「安全と安心をお届けする」消防・防災の専門企業。建築物や法律に合わせた消防設備の相談および提案から、設計、施工、消防署への手続き代行、アフターサービスまで、一貫して専任のスタッフが対応している。

## 特許登録番号と内容

特許第 3789118号	消火用送水設備「耐圧性能点検装置」
特許第 4271707号	街かど消火栓 簡易水道消火装置「消火装置」
特許第 4361590号	街かど消火栓 簡易水道消火装置「消火用ノズル装置」
商標登録第 5243117号	街かど消火栓 簡易水道消火装置

(2011年10月現在)



代表取締役会長兼社長  
龍 龍太郎さん

ACTIVITIES & ACQUISITION IS INTELLECTUAL DATA

## COMPANY DATA

所在地：東京都豊島区巣鴨 1-4-17 電話番号：03-3946-7411

URL：http://www.chirika.co.jp/ 創業：1921年8月 設立：1928年9月

資本金：9,967万450円 売上高：34億8,000万円(2010年度実績)

従業員数：150人(2011年現在)



消火王印ピストル型消火器。創業初期、同社で製造販売されていた、日本の消火器の先駆的製品。消防博物館にも展示されている。消火王印のブランド名を現代にも残そうと、「街かど消火栓」にも、消火王印をつけて商標登録をした



特殊開発ノズルの放水状況。放たれた水は、水玉状で飛んでいき、7～8m先まで、横90cm、縦1.5mの楕円形に広がり、燃焼物からみづくように消火する



簡易水道消火装置(街かど消火栓)の消火用ノズル装置。5つの先端は、径の大きさがそれぞれ異なり、横に小さな穴が開いていて、空気を取り込む仕組み。この開発ノズルが高い消火効果を発揮し、消火作業を容易にした。水道圧を利用し、電気や石油などのエネルギー源を一切使わないため、環境に優しい製品でもある

現在、街かど消火栓は、消防車が入りにくい住宅密集地域や道路狭隘地区、神社仏閣などでの設置を優先的に提案中。今年度、豊島区での設置推進も決定した。

## 開発のヒントはお客さまから。 技術を広めるのもお客さまと共に

こうした同社独自の製品開発に取り組み、知的財産権の推進・管理を担っているのは、佐藤常務ほか総務部。最初に、目の不自由な人に避難経路を知らせる「触地図」で実用新案を取得。続いて、消火用送水設備「耐圧性能点検装置」で特許を取得した。これは、法改正によっていっそう細かな検査方法が必要となった、消火用送水設備を点検するための技術。同社では以前から使われていた技術をベースに改良したものだったが、「アイデアで特許は取れるものなんだ」と、その後の知的財産権の取得推進を進める大きなきっかけになったという。この他、高層階からの避難に用いる「緊急脱出装置」も開発している。

## 技術の保護と早期普及のために、 特許を取得し技術をオープンに

「分解すれば構造は誰にでもわかるし、やろうとすれば低価格の類似品も作れてしまうシンプルな製品。ならば最初から技術をオープンにして権利化した方が安心。また、この『街かど消火栓』が日本中に普及し、火災が一件でも減ることが

創業時からモノ作りを得意とする同社では、独自の製品を生み出そうという意識が高い。アイデアをひねり、形にしていくのは佐藤常務だが、開発のヒントとなる声を拾い上げ、また、独自の技術を世の中のニーズに合わせて広めているのは、営業本部営業統轄部のメンバーたちだ。再び、モノ作り企業として、注目されるようになってきた今こそ、「若い人にもどんどん提案してほしい。消防・防災業界の常識に捉われない発想を大切に、ヒントは現場にあるのだから」と佐藤常務は期待を寄せる。いずれは、海外特許も取っていきたいとの思いはあるが、消防・防災業界は、まだまだこれから可能性の広がる世界。まずは、国内マーケットでのさらなる飛躍を目指していく。



常務取締役営業本部長  
佐藤 栄紀さん

## 大正10年創業。戦前からの モノ作り精神が平成の世に復活

中央理化工業株式会社は、今年、創業90周年を迎えた、消防・防災のプロフェッショナル。大正10年の創業で、創設初期には消防の人たちも携帯していた「ピストル型消火器」や「自働消火弾」なども製造販売していた。その後、火工品事業部門を、現・日本冶金工業株式会社に分離。消火機器メーカーとして歩んでいたが、第二次世界大戦時の空襲によって、本社と工場を焼失してしまう。戦後、営業を再開してからは、単なるメーカーではなく、消防・防災にかかわる製品、設備、サービスを提供するトータルソリューション企業を目指すこととなる。

しかし、現在、三代目となる脇龍太郎代表取締役会長兼社長には、ずっと、“モノ作りの会社”として復活したい、との強い思いがあった。「工場を持たないメーカーがあってもいいじゃないか。世の中にある商品を単に売るのではなく、常に安全と安心を考え、何か必要とされているのかを考えながら仕事をしなさい」といい続けた。いつかまた、オリジナル製品で勝負をするのだというモノ作りの精神は、同社から消えることはなかった。

## ありそうでなかった、水道水を使った 初期消火装置街かど消火栓」で特許を取得

「そんな社長の願いを叶えようと、心のどこかでずっと

思っていました」と、語るのは、勤続31年の常務取締役営業本部長の佐藤栄紀さん。ここ数年、オリジナル製品を開発し、立て続けに知的財産権の取得を果たしている。中でも今注目を集めているのが、2009年に特許を取得した「街かど消火栓(簡易水道消火装置)」だ。これは、身近にある水道の蛇口に接続するだけで、初期消火活動ができる画期的な装置。特殊な開発ノズルによって、水道水の勢いを増加させ、大量かつ遠くに、広い面積での放水ができる。水道が使える限り、長時間での使用が可能なおえ、軽く、操作が簡単なことから、女性や子供、年配者でも容易に扱えることが大きなポイントだ。

「蛇口をひねれば水が出る。こんなに身近にある水道を初期消火に使える道具はないのか?と、親戚筋からいわれたことが、開発のきっかけでした」と、佐藤常務。文献やインターネットを調べるうちに、とある東大阪のベンチャー企業が製造していたノズルと出会う。洗浄用の放水ノズルだったが、目的は違っても、水圧の低い水道水を使っている点は同じ。この原理は使えると、共同で開発に取り組むことに。何度も、何度も試作を重ね、ようやく完成したそのノズルには、消防のプロでさえ、「目からうろこ。第三のノズルだ」と舌を巻く。この開発ノズル単独と、消火装置の両方で特許を取得した。

## 知的財産活用のポイント

最大の目的。そのためにも技術をオープンにして普及をはかりたい」と、特許取得の意図を語る佐藤常務。消防・防災のプロフェッショナルとしての意識が同社の知的財産の活用にも表れている。